

## 欧米でみた日本人留学生

佐々木 現 順

私の外遊生活は過去九ヶ年にわたってしまった。今回も昨年より本年四月まで一ヶ年ドイツ政府招聘ハンブルグ大学客員教授として佛教学講座を担当し、おかげで責を果して帰ることが出来た。その間、欧米での経験を今は日本人留学生を中心として単に断片的な仕方でも素描してみた。

### 一、アメリカ

私の任務上、残念ながら留学生諸君の中へ入って暮した経験はなく、いつも傍観者の立場にゐなければならぬ生活であった。従つて彼らの立入つた生活はよくわからない。けれども同僚の教授達の目に映じた印象を彼らと食事しながら聞くことも出来たし、又、各教授、研究室に附属している秘書の諸女史から聞くことも出来た。私がこれからあげる学生印象記はかうしたものを素材としているから間接的見方であることに限界をおく。

でも私個人の実見に裏付けられたものであるから、少くとも *Vermutung* ではないだろうと想像する。

第一に一言に欧米と言ってもアメリカ大陸とヨーロッパとは大きな相違がある。全体の研究意図ではアメリカは現代問題に興味を持ち、ヨーロッパは古典研究にそれが向けられている。アメリカでも東部、例えば私がフルブライト教授として属していたハーバード大学とかコロンビア・エールなどのある東部は宗教的文化的にヨーロッパの影響下に今なおあると言つてよい。だから大学のアカデミズムとして古典研究が君臨している。然るに西部のカルフォルニア・ネバダ・サンフランシスコ等に散在する大衆的大学は工業、民族等の關係で、現代文化への興味が高い。従つて、アカデミズムを求める日本人留学生はこれら西部地方の大学はものたりない。特に東洋学研究という分野になれば西部のカルフォルニアを中心とした大学は誠に寥々たるものであつて研究の意味がないと思うかも知れない。私の経験したところ、これは事実であると信ずる。ベック・ワードとまでは言えないが、そう批判する人さえないが、ともかくアカデミズムは育っていない。そもそもアメリカはかつて言った如

く(佐々木現順「アメリカにおける現代思想と宗教研究」大谷学報四二巻一  
一号二男昭三七)  
大衆の支持なくして文化は育たない。而も西部の大衆は、東洋特に佛教への関心を持ってゐる。だから将来は東洋研究は頭をあげるかも知れない。然しアカデミズムとしてヨーロッパとか東部アメリカと比較しうる水準には到底なり得ないと思う。古典にきたえられた日本人留学生が西部へ行くとき問がスポイルされて、もとの木阿弥になるだろうといはれる。西部にいる日本人東洋学の学生が日本の学友に対していつもコンプレックスをぬげきれないということだが、それらは確かに学の大衆性に慣れてゐない日本人留学生として尤もなことである。日本人留学生は、日本の出版書を買ってそれを金科玉条にして、それをビックアップしてレポートを作っている。しかし、彼等はその日本研究さえ良く理解するには余りに若い。

元来、東洋学研究に西洋へ行くということは、丁度日本語研究のためロンドンへ出かけるようなものである。それ以上に我々の心配になる点は次の事実である。即ち日本人留学生の中で多くの者がアメリカへ極めて容易な仕方である。彼らには日本でのバックもアメリカ大学のバックもない。アメリカ大学へ入籍さえしていない者が如何に多いことか。帰国してアメリカの大学で勉強したということがよく言はれるが、それにはその大学の学生名簿、或は学位(B・AとかM・A)の証明書を見るまでは誰も信用しないようになったが、これは良い傾向である。日本も国際的になった証拠である。学生名簿の写真写し位は必ず調査しておかねばならない。これは雇主側への注文であ

る。もう一つ、留学生側として注意すべきことは、若い留学生(東洋学について言っていることだが)では基礎(古典語・現代語)が出来ていないから、アメリカの如く人の論文をつぎたしたようなレポートをたくさん書かねばならぬ大学制度の国では、永続しない断片的研究になり、実力がつかない。具体的に言えば長くアメリカにいても、内容どころか英文さえ上達はしないと断言してもよい。内容はすぐずれる。日本の知識は種子ざれになる。これは大学と全く隔離している佛教布教界ともなれば一層甚だしい。布教内容の種子切れということである。だから、それを逃れるためにはアメリカ人にとって苦手である古典語の知識・操作を身につけてから出かけることである。在米邦人相手なら別だが白人相手ならせむ必要である。アメリカ人が古典的背景の説明に非常な尊敬と興味をそそのことは私自身もハーバード大学やカルフォルニア大学で経験したことである。つまりアメリカで足りない特技を日本人がしっかり身につけてから留学するのでなければ、すぐ自分の学問がくずれて無意味となるから注意を要する。

アメリカほど留学の容易な国もなにかわり、アメリカほど留学の意味のない国もない。それを有意義ならしめるためには学生自身の日本に於ける修業期間が大きな意味を持っている。私人個人としてみれば、東洋学(佛教を含む)研究はアメリカよりヨーロッパの方を推し得る。特に若い学生にはそうである。若くして帰るアメリカ帰りの留学生は往々にして帰ってくれば物の用にもたたなくなっていると言われるのも、本人の不勉強の

せいだけでなく実はアメリカという社会機構のなせるわざでもある。だからその気の毒な結果は宿命的であるといへる。

成績のことだが、アメリカで「A」と言えば九十点以上だが実は日本の見方で厳しく見れば必ずしもそれほど良好とはいへない。アメリカの「F・U」というのは、これから研究をはじめようとする者に与えるのであって長年の研究の成果ではない。私も時々、アメリカや外国の大学の依頼で博士論文の審査を依頼されているが、ヨーロッパ・インドからの論文と比較して大きな観点の差がある。かつて、ワシントンでアメリカのディグリーが問題になったとき、ワシントン政府の教育委員会が答えて曰く「P.D. はアメリカの市民権を得たという程度である」と。アメリカはどこまでもアカデミズムよりも *citizenship* (市民) を重く見る国だとしても小首をかしげて聞いていた外国人学者が多かった。アメリカからベルギーへ帰った或るベルギー学生はベルギーでもう一度やり直しの研究をしている。彼はすぐれた言語学者となっている人だが、ヨーロッパはむづかしいと言った同じことを私に語った。と言ってもこれはアメリカの知識水準を批判しているのではない。学生の学位と成績に関する限りそうであると言っているだけで、学位を始めとして学生の学問が続けばよくなるというのである。ここでもまた、我々はアメリカという国が可能性の多い国であるということを言いたかったのである。

日本人留学生は必ずしも上述の如き者はばかりでは勿論ない。英文学専攻の日本人学生で東京のM君の如くすぐれた成績をあげ

げて帰った者のいることも知っている。米人教師を驚かしたという。併し一般に言えることは、日本で狭い門とされている唯一の登龍門たるフルブライト留学生は別格である。到るところの大学で好成绩である。学生のフルブライト留学生はたとへ恋愛トラブルが聞えてもアメリカ政府が学費をストップする。毎年委員が廻って歩いて学生の品行のタネ集めをしている。学業を怠けられない仕組になっている。日本とアメリカ政府でよりすぐった学生であるからである。その他、筆記試験を通過した学生でなければ留学生として外国へ出かけても効果は低いということは欧米でいつも感じたことである。所謂コネ留学では、アメリカでは一般の信用もないということをアメリカ熱にうかされている学生がいたらそれらのために言っておきたい。四月にヨーロッパより帰国して見てよい傾向と思っただのはテレビや新聞での不良外人の紹介である。外人崇拜の日本人にぜひ見せてやりたいと思っていたところである。アメリカばかりではないが、そのニュースは確かに外国人の多くを代表する。私はいつも外国政府の恩恵をうけた。だから、それを批判するのは恐縮だが決して反米主義というものでもない。日本がアメリカをほんとうによく見てやってほしいからであり、彼らにアメリカで出来ないことは日本でも出来ないということを知らせてやりたいからである。アメリカ本国には、日本以上に厳しい社会秩序があるのである。だから本国で暮せない者で、日本へ流れこむ者も少くない。我々が外人に対して心しなければならぬことである。

要するに、アメリカへの留学は日本人なら、ハーバード・コロンビア・シカゴ・エール諸大学のある東部へ行き、そこで古典的教養を延ばすことが一番適している。それには、困難な試験によるスカラシップを受けるべく実力を試すことである。ところが、アメリカのカルフォルニア等のある西部へ渡るといふことは、自分の持っているなげなしの知識でさえ失う危険をふくむ。西部へ渡るとは容易だが日本へ帰っても意味は少くなかろうというのである。然し、成熟した学徒ならこの限りにあらず。私は、大学の優劣を言っているのではない。大学に適應する本人の知識の度合を言っているのである。

日本人学生のアルバイトについて言う。アメリカはヨーロッパと違って少々のアルバイトを持つ。といっても、女子学生なら子守り・掃除婦・女中であり、時には着物のショーぐらい。休みだけで、一ヶ月八十ドル(三万円)も住みこみで取ればよい方である。子守りは一時間、一ドル七十五セントから二ドル位に過ぎない。物の用にたためぬのは日本男子留学生であろう。着物のショーも出来ない。中国人のように料理も出来ない。日本では、主体性の確立等とデモをやらかす学生でも料理一つ出来ない。結局、皿洗いが一番よいアルバイト。それも金持ちの少くない東部では全くだめである。一番金なしは日本男子留学生であり、而も帰国して一番しゃべりたがるのもこうした学生らしい。一ヶ月二百ドル(七万円)はどうしてもいるが、これだけを収入として持つ学生さえまれである。七万円といっても日本では二万円程度の生活しか出来ない現状である。従って、

スカラシップの定額が入用。アメリカ政府の奨学資金が一番高いが、その他はすべてそれ以下であるから苦しい。本はペーパー・カバリーの一ドル―二ドルの安物しか自分で買えない。但し、図書借出しが盛んであるから教養程度の研究には差支えない。書かれたレポートでも受けつける。博學で話題は多いが、オリジナリティー(独自性)は持てない。日本からの金持ちのお嬢さんなら仕送りで暮し、又、成績もあがるが、貧乏人のせがれは世界いたるところやはり貧乏人であるに変わりはない。こうした日本人学生には、グループ意識が強い。日本では、反伝統的行動で新しがった者もアメリカへ来ると日本人のグループ意識が出て、日本人同志でかたまつて歩く。英語が上達せず帰るのもここに一つの原因がある。会話位は同じことの繰り返しにすぎないから容易であろう。内容を持たねば英語上達は永続しまい。「如何に話すか」でなく「何を話すか」が問題であろう。今ではアメリカ人の方が日本語を話し始める時代となりつつあるほどである。

もっとひどいになると外国旅行だけで帰った者が通訳や英文関係に雇われる現象である。これは雇う方に非があろう。

又、軽薄なアメリカ経験が反って禍となり日本で意の如くならず、再びアメリカへ逃避し不幸な人生に陥った幾多の例も知っている。これは特に女子留学生の間に見られる。アメリカ留学の名で、アメリカ逃避をするのではないけまい。

以上、述べたことはアメリカ留学生の暗い面であった。此等のことは、基礎学もなく若年にしてアメリカへ渡つた青年達を

おそう危険のいくつかである。これは多少とも一般の青年留学生に共通していると思う。

勿論、明るい生活も無いわけではない。例へば日本人学生は一般にその感覚が sensitive で好ましいと言われる。感情の粗野な国で育つてゐる女性の愛想である。アメリカ女性が、小心者の日本男子を反つて sensitive などと賞めるのも、実は動物的本能によるもので必ずしも本質的ではない。その証拠に賞めても彼女らは尊敬してゐるとは思はれないからである。或る大学で日本の男子学生がインドネシア人と並んで着物と帯をつけてテレビのショーに出てくれと言われた。彼らは、すぐおこつて大和魂を發揮し、ついにことわつた。日本の伝統を批判する新しがりやの学生もアメリカへ来ると「純」大和民族になり変わり、神武天皇時代へと逆行する。相談を受けた私は、「金の方が神武天皇より大事だろう。テレビに出て金だけ取れ」と言つたのであつたが、学生らは反つて私の時代よりも一層古い伝統を固守した。これは面白く、私が興味を引いている「宗教と民族性の研究」の良き資料ともなる。

勿論、真面目な学生もいる。しかし、真面目に学問するには余りに彼らには基礎学問がなさ過ぎる場合が多い。アメリカの初等教育を受けてアメリカ社会で幼少から育たない限り、若い日本人学生の学問はアメリカでは誠に進歩し難い。これが東洋学研究の名で集まる大学出たての日本人留学生の間に見る實際のなげきである。

## 二、ヨーロッパ

おおよそ学問は新しい創造を目的とする。また創造はオリヂナリティー（獨創性）によつて現出する。更に、獨創性は環境と理性を基盤とする。もしそう考えるならば、これに応ずる国はヨーロッパである。ヨーロッパに近い地方を求めるならば、私はアメリカ東部をあげたい。ハーバード大学を中心とするアメリカのエリテと言われる東部の諸大学はアカデミズムの点でヨーロッパに近く、且つ、学生の研学の様子も極めて、ヨーロッパに類似している。二千余を数えるアメリカの諸大学の間には非常な大学差の存在することは想像以上である。だから、アメリカでは行き先によつてとんでもない危険がひそむ。留学地に注意すべきである。

ヨーロッパには、アメリカの如き大学差はない。特に、ドイツともなればその意識さえない。それには、学生が国家試験を通ること、各ゼメスターによつて如何なる大学へも自由に入れること、教授を中心にして集り得る制度になつてゐることなどがあげられる。日本も好むと好まざるとにかかわらず、大学の特色はなくなり、特に、すぐれた大学もなくなりつつある。これは世界の一般的方向である。

ドイツのアカデミズムの基礎的条件は、第一にその環境の良いことである。それは静寂そのものである。世界第三の開港都市たるハンブルグの大学町でさへ、夕方ともなれば物音一つも聞えない程の静けさが町をおおう。学生の入る飲食店、カフェ

が少くない。学生は、大学で朝八時半より夜十時まで全日を過している。大学は、彼らにとっては家庭である如くである。ハーバード大学にはまだ茶会が屢々あったが、ここではそれさへすくない。学問一途であり、クラブ活動もない。そもそもクラブ活動はアメリカでは、高校生のやる事だ。大学でも少々あるが、日本の如きものではない。日本のあれはやり過ぎである。アメリカにもヨーロッパにもあのようなクラブ活動は存しない。あれは新しいものでなくて実は「グループ意識」という古い日本の習慣を心理的根拠としているもの如く思われる。学生は真に新しい自分を見出すべきでないか。とまれドイツの大学生は勉強専一である。彼らは群をなして教室から教室へと聴講に歩く。ウルストとゼンフトそしてコココーラ、これがよくもあれだけのエネルギーを作り出すものと感心する。アメリカ的社交パーティや研究法は全く関心外である。戦後教育法も大学の制度も変えられていないからであろう。私は、二回同じドイツの大学の講義を担当した。その頃の学生は、今は他の大学の教授・助教授にさえなっている。ハンブルグ大学から多くの生徒が全ドイツに迎えられていた。ここは今では、東洋学のヨーロッパでの中心となっている。ハーバード・ロンドン・ハンブルグが世界の東洋学関係の三大学と言われる。ここには経済的社会的に恵まれた環境と共に静寂な人の世がのこっているという恩恵がある。ドイツが今や他のヨーロッパ諸国の羨望的的になっていることは英・佛等の旅で知った。余りにインテレクチュアルだというアメリカからの批判はある。次に、学生の就職

は主として外交官或は、女子なら教育方面であるという。従つて、語学力と古典の解読を中心とする。こうしたバックを失いつつあるフランスは昔と同じく、ドイツに次ぐ程の位置でさへ今なお確保し難い現状にある。オーストリアまで下れば経済的貧困が目立ちそこの悠々とした東洋研究は期し難い。これは残念なことだが、将来性もすまい。

以上の静寂さと経済的豊かさという環境は高いアカデミズムを生む第一の基盤である。元来、ヨーロッパへの日本人留学生は質がよい。アメリカのようではない。アメリカには、日本を追われた学生・学籍を持たぬ自称留学生が多く入りこんでいることが屢々レポートされてある。今、アメリカには三千人を数える日本人学生がいるという。その中で日本へ送り返された者もいるから充分注意してやってほしいと通達が出たりする。こういう心配はヨーロッパ特にドイツでは皆無であるようである。ただし、語学の上で大学に籍をおけるまでに試験に上達した日本人学生は極めて少なく、殆んどここでは聴講程度だという。私もよく夫人秘書に尋ねて見たが、入学に課せられる語学試験で多くは落第、少くともハンブルグ大学では、それらの学生を南の大学へ送るといふ。だからドイツの大学生として入籍することは勉強していても困難である。然し、日本人のグループを見てもアメリカと違って彼らは第一品がいい。皆、日本のバックを持ち自重している点が、アメリカに於ける諸君と大きな相違だった。

次に、アカデミズムには合理性が根拠になる。ドイツの静け

さも合理的人生の生み出したサンプルだと思ふ。船のゆきかう港のエルベ河畔でさへ寂靜としている。白鳥の浮かぶアルスタール湖畔にも靜かに汽船のにぶい音が聞えるだけ。これが、アメリカに次ぐ工業国かといつも思つた。官庁にしても店にしても同じい。合理性を生きてゆく彼等には、宣伝の必要もない。人生と町々の騒々しさは多く実のない宣伝によるところが、ドイツでわかつたようだ。彼らにはそれがない。飲食店のテレビ、ラジオは禁止されている。ハンブルグ郊外の電車には改札口に車掌もいなくなった。而も、駅に掲示あり曰く「我々は相互に信じ合ねばならない」。よくも、ただ乗りがないものだと思ふ。各自が距離の地図を眺めては乗車賃を払う仕組。昨年から始められた新しい試みだった。或るとき、私が忘れて乗り過したので、余分の金を駅へ持って行ったら「いりません」と言つてことわられた。こんな合理性を食つて生きているような国が世界のどこにあるだろうか。近いところだとタクシーでも「近いから歩きなさい」と言われる。外人客と見ると高価をふきかける国々と大きな相違である。

こういう国だから日本人学生は生活し易い。三百―四百マルク(三万―四万円)もあれば充分。この金はしかし、日本の二万円位の生活内容と思えばよい。月給が日本の四倍半(アメリカは五倍)の高価であるのに食費は日本の二倍位。日本の収入と消費のパーセンテージを見ると人は驚く。ドイツの比率でいくと、日本ではたとえばコーヒーは一杯三十円でよい筈。ホテルは五百円でよい筈。やれコンペ代とか会食代とかいうつまらぬ飲食費の心配はない。日本の新しがりやの学生にして、今なお

なぜそのような古い社会であつた消費をするのだろうか。合理性とは理屈をいうことではない。合理的に飲み食いして生きることではなかつたか。

ヨーロッパに於ける日本人留学生はこの点、経済的合理的生き方を居ながらにして学ぶ。靜寂な湖畔で十二分に日本で学び始めた古典の知識をみがき上げることが出来る。その上、近国へは、いとも容易に旅したり実見するという楽しみもある。然し、合理性はつめたたく、人の心を閉じるといふ淋しさも味わねばならない。ヨーロッパ旅行中、多くの日本人留学生に出会つた。いずれも湧き上がる熱情にひとみを輝かしていた。彼らの前に立ちふさがるものは、よこれた人間ではなくして永遠の真理をひめた古典文化であるからである。南はギリシアのアクロポリスの神殿から北はデンマークのヘルシンガーボルグ城に至るまで、ヨーロッパの文化は若き知性をねむらせてはおかない。人間嗅にむせかえるよどんだアメリカの目、古典の秘境をさぐるヨーロッパのすんだひとみ、果してそのいずれが真の学道だろうか。

最後にアルバイトのことであるが、ドイツでは全部を家庭保護者に依存している。大学のスカラシップをもらう若干の者は少々の助けになるが。ドイツでは大学教育は一種の特権階級のものという意識が強い。だから勉強も激しい。社会も信頼する。ベルギーのルヴェーン町で、学生と一緒にバーへ行こうとしたら二人の大学生は「我々が大学生だということを皆が知っている」と言つて中へ入らなかつた。これはベルギーという特殊な国柄だけとしてもこういう事実が今どきヨーロッパに見られる

のである。飲み食いの多いのは中国人と日本人だと言われる。これは「極東人には、大きい胃袋がついていて形も大きい」——これはドイツの医者の話だった。「日本人は汚い家に住んでいるから、たまには美しいレストランで美食を取ろうという日本人のムード好みで食堂にたむろする、つまり芸術的だからだ」というのが私の苦しい答えだったと記憶する。ドイツ人学生でざへアルバイトがないから、日本人学生にはあろう筈はない。たとへ女子学生だけにあつても支払いは極めて少く、而も義務が多いので彼女らは続けられまい。でも幸いハンブルグ大学の日本人女子学生らは裕福な家庭の子女の如くだった。アルバイトの必要もないようだった。自分の金で暮すというのがドイツでは普通である。

もう一つアメリカと違っている点は、ここにいる日本人留学生には例の「グループ意識」が現れないという点である。日本人同志でたむろ出来るほどの数もないが、皆、ドイツ人の中へ解けこんでいこうとしている。これはアメリカ人の如く表面上の愛想だけで、深い内容を持たない話だけで去って行く人々と違ひ、深い話題を好むというドイツ人の民族性のおかげである。彼らは日本人の話題を充分受け入れる歴史と文化を持っているというのに深い理由があると考える。とげこめば終生の友人となり得るのである。アメリカのような誠意のないブラット・フォーム・スピーカーなどドイツの学生にはみい出せない。ドイツの学生らは話しごたえのある学生達である。日本人学生には好い相手であろう。だから日本人だけのグループを作ったりして孤独を悲しむ必要もない。但し、ポピュラーになった

英語を話す国よりも独・佛・伊を話すとすれば一層の努力をしないと、遂にノイローゼになる。ヨーロッパで相手にされなかったうつぶんを日本に帰って晴らす例を時々見る。例えば、日本人の講演なのに外国語で通訳してみせる。而も聞いている者は日本人ばかり。こういう妙な大芝居さへ演ぜられる。そしてヨーロッパでの不満を曲った自己主張によつて満足させようとする。アメリカは今では東洋の如くになり、日本とそれほどどの変りなく、丁度東京の丸の内あたりをあるいている如く、別に異国の感じはしない国である。特にロサンゼルス、シヤトル、サンフランシスコがそうである。異国的西洋的なものは今ではヨーロッパだけに残っていると信じる。アメリカへ行けば日本人留学生は、あたかも旧植民地の満州か台湾へ行った位の気持ちしかいだかないだろう。それほどアメリカには東洋人が多く東洋文化が入りこんでいる。従つて新しい文化的感覺を期待するならば歴史あるヨーロッパの方が良い。ここでも我々は歴史というものの深い意味を今更の如く痛感する。

学問に必要なものが獨創性、合理性、及び静寂な環境といふ三者なりとすれば、それに相応した国を選ぶことが、学生留学のモットーであるべきであろう。ともかく、ドイツのアカデミズムには「宣伝」がない。この簡単に明白な「事実」こそ日本が特に反省し認識しなければならぬ事柄であろう。他の邪魔を無視して進むその確固不拔の自信を身をもって体得して欲しいと願ふ。世界の動向は実力の勝利を保護する方向に向きつつあると思ふ。だから実力以外に勝利の道はない。それへの進撃、これが将来の留学生に対する私の切なる悲願である。